

## イタチザメ卵とアイザメ卵を主体とした飼料による ウナギ初期飼育の可能性

|       |                                                                                                     |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese                                                                                        |
|       | 出版者:                                                                                                |
|       | 公開日: 2024-08-06                                                                                     |
|       | キーワード (Ja):                                                                                         |
|       | キーワード (En):                                                                                         |
|       | 作成者: 増田, 賢嗣, 今泉, 均, 橋本, 博, 小田, 憲太郎, 古板,<br>博文, 松成, 宏之, 照屋, 和久, 薄, 浩則                                |
|       | メールアドレス:                                                                                            |
| URL   | 所属:                                                                                                 |
|       | <a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010500">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010500</a> |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution 4.0 International License.



# イタチザメ卵とアイザメ卵を主体とした飼料によるウナギ初期飼育の可能性

増田賢嗣・今泉 均・橋本 博・小田恵太朗・古板博文・松成宏之・照屋和久・薄 浩則

現在ウナギ仔魚用飼料としてはアブラツノザメ卵を主体とする飼料 (SA) が用いられている。この飼料により飼育が可能になったが、サメ卵の中でも特に本種の卵が優れていることは確認されていなかった。加えて、シラスウナギ量産に対応するためには新たな飼料原料を見出す必要がある。本研究ではイタチザメ卵主体飼料 (GC) およびアイザメ卵主体飼料 (CA) を調製し、SA との初期飼育の比較試験を行った。その結果 GC 区、CA 区ともにふ化後 21 日まで生残が認められ、GC 区の生残率および両試験区の終了時全長は SA 区に劣ったものの、CA 区の生残率は SA 区に匹敵した。これにより複数のサメ卵が飼料原料として利用可能であることが明らかとなった。

水産技術, 4 (1), 7-13, 2011